『伊勢物語』東下りの一節 ―江戸期の古画にそえて―

高城弘一（竹苞）
Koichi（Chikuho）Takashiro

この数年、古い歌仙絵にその歌仙の詠歌を書き組み合わせて、一つの作品となるような創作活動を行っている。本誌『大東書道研究』（大東文化大学書道研究所発行）において発表した関連の拙作は、以下の通りである。

●「坂上是則の歌三首」（第二十号、平成二十五年三月）

●「斎宮女御の歌二首　―斎宮女御の古画にそえて―」（第二十二号、平成二十七年三月）

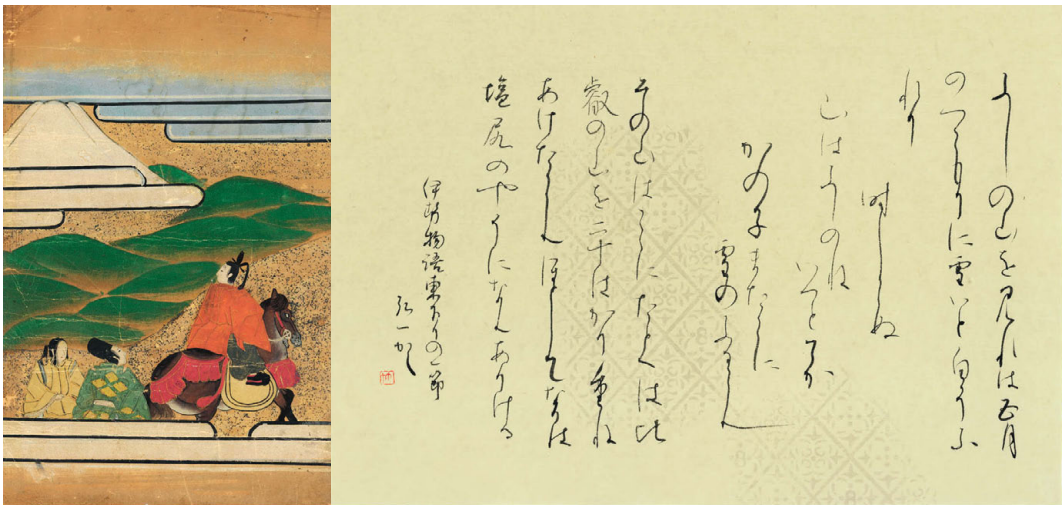
●「小野小町の歌二首　―小野小町の古画にそえて―」（第二十三号、平成二十八年三月）

●「藤原興風の歌三首　―藤原興風の古画にそえて―」（第二十四号、平成二十九年三月）

近時、江戸時代に書かれた奈良絵ふうの古画を入手した。一見して、『伊勢物語』の東下りの一節で、従者を伴う、馬上の業平と思しき主人公が富士を仰ぎ見ている構図と判明した。そこで、拙作の題材であるが、この古画に合うように、『伊勢物語』東下りの一節にした。

料紙は、栄豊斎で購求した染紙雁皮紙の型打ち料紙を使用した。これは、五色各数枚のセットで廉価ではあるが、たいへん書きやすいもの。その中でも、古画は富士山に雪を頂いているものの、旧暦の五月晦日（つごもり）ということで、草木の繁茂する時期を想定して、緑色のものを使用することにした。散文に和歌が一首入るという組み合わせで、変体仮名を用いずに（「む」＝「ん」以外）、漢字仮名交じりにした。潤渇・太細の変化をつけ、奥行きが出るようにし、さらに、散文部は行書き、和歌は散らし書きによって、余白の美を探求した、今回用の書き下ろし作品である。

筆は、イタチ毛の柳葉筆（神技堂製「つきしぐれ」）で、墨は、鈴鹿墨で胡麻油煙製という「古筆」を用いた。落款印は、本学中国学科卒業・鳥山駿太郎氏刻を使用。



25×52.7㎝

【釈文】（／は改行）

ふしの山を見れは五月／のつこもりに雪いと白うふ／れり

時しらぬ／山はふしのね／いつとてか／かの子またらに／雪の

ふるらむ／

その山はこゝにたとへは比／叡の山を二十はかり重ね／あけ

たらむほとしてなりは／塩尻のやうになむありける

伊勢物語東下りの一節